

## 何もしない勇気

何もしない。動かないというのは意外に難しい。特に批判を受けたり、何か提言されたときに動かないのは難しい。批判や提言はいつでも正しいとは限らないから、いちいちそれらに対応して動く必要はない。しかし、動かない場合には、何故、対応しないのかというような非難がくる可能性が高い。批判や提言が不適切だと理由を説明しなければならぬが、批判や提言は「良かれ」と思ってやっているのだから、それを否定すると、相手のメンツをつぶすことになって、相手が怒りかねない。相手の顔をたてて、当たり障りのないことを適当にやる方が無難だ。しかし、適当にやるのは難しい。意味のないことをやっているのだからあまり時間や努力を振り向けたくない。その一方で、何事もいい加減にやったりしてはいけないという教えもある。いい加減にやっていると、当然、成果は上がらないから、そのうちばれる。ばれると叱られる。ばれたら謝れば良いともいえるが、自尊心は傷つくし、そんなものだと思いき直れるほどの大人物でもない。人間の集団は複雑で、中には一生懸命やる人が現れる、こういう人を見ると、適当にやっているのが申しわけないという気分にもなる。あからさまに他人の意見を無視するというのも何かと角が立つ。実際、こういうメカニズムで、あまり意味のないこと、やらないほうが良いこと、やってはいけないことが一生懸命に行われることになる。確かに無駄だが、それで実害がなければそれでも良い。だが、時には何かをして取り返しのつかないマイナスの効果が表れることがある。こういうのは結構危ない。こういうことを考えると、何でも一生懸命やればよいというわけではないことはわかる。一方、やらなければならないこともあるから、すべていい加減というわけにもいかない。つまり、何をするのか判断が重要だということだ。こういうことをどう判断すべきか教えてくれる人はいないし、どうすれば良いのか筆者には全く分からない。だが、一般的に注意しなければならないことはありそうだ。

### 2)

もっとも、無駄なことをしそうなのは、何かの批判をかわすために何かをするというケースだと思う。世の中には誰にでも容易にできる批判というのがある。何かの不満があるときに、きっかけを与えるとこういう批判が出てくる。大学を例にとると、研究成果があがっていない。教育成果が上がっていないなどは良くある批判だ。国際開発に関して言えば、資金援助の割に開発効果や対象地域の福祉が向上していないというのがある。政治批判とかマスコミ批判とかいうものもある。大体こういうのはいつでも誰にでもできる批判で、大して意味はない。大学は研究教育機関でそれが業務だから、研究成果が上がっていないという批判には弱い。しかし、そもそも、研究成果が上がるとか教育成果が上がるとかいうことはどういうことなのか、きちんとその判断基準を示して批判しているのだろうか。単なる印象にすぎないものが、批判の根拠になっているような気がする。そもそも、研究などというものはめったに成果が上がらない。それでも継続的にやるから、たまには成果

が上がることもある。そういう積み重ねがかかわりあって、全体として「学」が構成されている。そういう「学」が存在させていくことの方が、基準の不明確な印象に対応するよりも大切なことは間違いない。教育もそうだろう。部分的に何かの弱点を取り上げて教育を批判することは容易だ。しかし、国民教育が日本の近代化に果たしてきた役割は否定できないだろう。大きな流れの中では我が国の教育は評価すべきだ。いわく、英語ができない。傑出した人物が出ない。統合的な判断力を涵養していない等々、確かにそうかもしれないが、こういう能力はそもそも教育によって涵養されるものなのか。少なくとも学校教育ではこういう能力の涵養は難しいのだと筆者は思っている。学校教育は、やはり国語・算数・理科・社会が基本だろう。体育・技術家庭・給食など、日本の教育はユニークでその教育技術的にも発達して大きな成果を上げている。こういうことは教育でできる。できることをしっかりやることは、出来ないことをやろうとすることよりも大切だ。現にできていることを犠牲にして、部分的な批判に答えようとするのは愚かだ。多分、自分自身が傑出した人物ではなく、英語が話せず、総合的な判断力がない人が、自分ないし自分の周囲の人がそうであることの責任を教育に押し付けているのだろう。こういう能力は本人の自覚がなければ涵養できない。もし、企業や役所の人間がそういうことを言っているのであれば、それは、その集団がそういう能力に価値を認めて、自らそうした能力を涵養しようとしていないにもかかわらず、そういう批判を教育に対してしているのだろう。「ゆとり教育」の失敗は、典型的な例だろう。文科省の人間がすべてそういう能力にかけた無能な人間だということに違いない。国際開発などは、そもそも、そんな簡単に途上国の社会開発ができるのなら、何でもかつては低開発国と言われた途上国ができたのか説明がつかない。

### 3)

政治・マスコミ批判というものもある。政治とかマスコミというのは、多かれ少なかれ腐敗しているものだろう。そもそも自己利益誘導が政治の動機だし、やっていることは利害調整による合意だから、それがいわゆる正義でないのは致し方ない。正義だけが一人歩きしたらみな迷惑するだろう。そのような事実を知りながら、適当に正義を装って記事を書くのがマスコミの仕事だ。彼らが記事を書く動機のはじめから捏造・歪曲がある。これらを正そうとすると、政治家やジャーナリストになろうとする人がいなくなる。政治もジャーナリズムも必要悪だからなくなると少しは困る。適度にグレーだったり黄色かったりするの現実として受け入れざるを得ない。あまりに黒いと見通しが立たないし、あまりに黄色いと目に染みる。だから、政治家やジャーナリストを時々叱り飛ばしておくことは必要だが、真っ白にしようとするのはやめたほうが良い。批判された側も、真っ白というそぶりをするのもやめたほうが良い。良くあるのは、何とか学の権威を連れてきて、自分たちの主張を正当化することだ。こういう権威主義的なやり方は相手を見下すやり方で、少し智慧のある人間にはかえって馬鹿にされる。そもそも、歴史学や憲法学などというの

はおよそ学問に値しない。これは、我が国の学会のレベルが低いと言っているのではない。世界中を見渡しても、歴史学などはかなりイカサマ研究者が多いのだ。歴史学に限ったことでもない。自然科学分野を見渡しても、たとえば小保方騒動は、一般に権威だと思われる Nature できえ、あの程度の偽造を見抜けない人たちが査読をしていたのだから、そのレベルがわかる。学会や科学雑誌の編集システムを改良しろと言っているのではない。学会の編集委員会のメンバーにだって見識のない連中はいくらでもいる。メンバーを変えてもシステムを変えても同じことだ。学というのはそういういかがわしいものを含みながら成り立っているのだから、そのいかがわしい部分だけを切り捨てようとしても無理がある。錬金術はイカサマ科学だがそれなりに科学の進歩に貢献した。いかがわしいものを排除しようと夢中になると、全体の活性を下げってしまう。だから、政治はグレーで、マスコミは黄色、学はいかがわしいと知りながら、それらとうまい距離で付き合う知恵が必要になる。

大事なのは、自分が何をしようとしているのかをきっちり把握しておくことだ。長期的な見方で何ができていないのか、出来ていないのかを判断するのが重要だと思う。外側の視点は、こういう使命・存在目的を理解したものでないことの方が多いだろうから、そういう見当はずれな批判は無視すれば良い。つミッションの自覚と、それに沿った 20 年あるいは 50 年スケールでの長期傾向の分析・評価が重要ということだろう。学会について言えば、時々、大きな時間スケールで、その「学」が社会の何に貢献し、何を創ってきたのかを振り返ると良い。

#### 4)

最近、東大がアジア No1 大学の位置から陥落したということが話題になった。こういう評価に対応すべく国際化の必要性等が叫ばれている。やめたほうが良い。評価した一つはイギリスの機関だ。新たに No 1 になったのはシンガポール大学である。シンガポールは大英帝国の植民地主義の輝かしい成果だろう。日本は西欧列強の植民地主義に対抗して、アジアを先導してきた。イギリスの視点からすれば、シンガポール大学が No 1 に決まっている。英語で教育ができる国際大学だ。植民地主義的理想の実現だ。意識しているかどうかは別として、シンガポール大学は大英帝国とミッションを共有している。アメリカの大学による評価では No2 は北京大学だそうだ。19 世紀後半から 20 世紀前半の東アジアの混乱の根本原因は、アヘン戦争に始まる大英帝国の植民地主義的侵略と清王朝の腐敗・衰退、自らの内部的優位の確保のために無原則に外国勢力と結びついて、自らの同胞を踏みにじった、当時の支那（念のために注釈をつけます。ここで中国と書く方が差別的のヘイト表現だということは、多少の国語力あり、歴史を知っている人ならばわかりますね。ついでに、腹が立つことに、しな→支那という変換が出てきません。）の政治指導者の非倫理性にあったことを忘れてはならない。国際化と称して、出来の悪い外国人の学生をほとんど無試験の別枠で入学させる制度が東大にできて、そのあと始末に困っている。授業の英語化

も進めるそうだ。筆者も英語で講義することがあるが、一方で、西欧語で書かれた科学を、適切に日本語に翻訳し、新しい概念も付与して、自らの言葉で科学を発展させてきたのだという、日本の歴史を忘れてはいけない。途上国の学生に、本当に必要なことは、自らの言葉で科学をすることなのだということは絶対に伝えなくてはならない。それが、非英語圏・非西欧圏で科学を進め先進国となった日本のミッションだろう。それが、アジアの科学を創造発展させること、それが東大がしなければならないことだ。その努力を伝えることが、国際化でなくてはならない。

東大の評価が下がったのは、多分、論文の平均被引用回数が下がったためだと思う。論文の被引用回数を調べてくれるおせっかいな機関があつて、その評価に振り回されている。水産学というのは国際的にはマイナーな科学である。技術学の色が強いから、産業規模が小さければ、当然マイナーで研究者の数も少ない。水産学として優れた論文でも、そんなにたくさん引用されることはない。水産学会の英文誌(Fisheries Science)も雑誌間の競争にさらされるから、論文の平均引用数を上げるための戦略を練る。若手の研究者は平均被引用回数が高い雑誌に論文が載る方が高い業績を上げたと言われ評価されるから、そういう雑誌に投稿しようとする。結果、平均被引用回数が高い雑誌ほど、良い論文が集まる。そこで、平均被引用数を上げるために、著名な研究者を招待して総説を書かせたり、編集段階で、自らの雑誌から引用するように指示を出したり、いろいろなことが工夫される。それもこれも、研究者の評価に被引用回数が使われるからなのだが、一体、この競争に何の意味があるのだろうか。筆者の周辺を見渡しても、その人を代表する論文・業績などは、たいてい一人の研究者について一つか二つだ。残りは、それに関連する業績で、それらの業績が一塊になっている。だったら、その塊が、科学や技術の進歩にどれだけ貢献したか、貢献する可能性があるかが評価の対象でなくてはならないだろう。普通、平均被引用回数で問題になるのは、論文が公表されてから1、2年の間のことだ。メンデルの研究が再評価されるまでどのくらいかかったか思い出せ。メンデルも偉かったけれど、メンデルを再評価したことも偉かった。つまり、傑出した人も出てくるけれど、凡庸な人もいて、凡庸様な人は凡庸な研究をするのだけれど、研究者の下心も含めて、そうしたやり取りが健全に維持されて、学が全体として機能していることの方が、いつ出てくるかわからない傑出した才能を無理やり創ろうとすることよりも大切だ。そうした人が出てきたときに、それらが健全に育っていく肥沃な土壌が必要だからだ。親父は教えてくれた。「職人には上手とか下手というのはない。職人が考えるのは、仕事をくれた顧客を満足させることだ。」だから、高いものを求める顧客は高い技術を持った職人を大切に、高いものを求めない顧客は、あまり高くない技術を持った職人を大切に。どちらの職人も大切で、そういうものが一体となって技術・文化・伝統ができる。特定の高い技術を持った職人だけが、技術を作っているわけではない。

いたずらに競争をあおりたてることは、化学肥料で作物を肥大化させるようなものだ。土地の肥沃度は下がる。小保方騒動の本質は、女性科学者に業績を挙げさせて、話題を作

りたいという、女性にとっても迷惑な動機にあると思う。少なくとも、初期のジャーナリズムの対応はそうだろう。どうしても良いことを何とかしようとして本質を見失った。断っておくが、ジャーナリズムを何とかしろと言う気はない。ジャーナリズムとはそういうものだから、そうではなくて、物事を決断しなくてはならない人は、そういうことにふるまわされない勇気を持ってといっているのだ。

5)

ところで、この文章を書き始めたのは、成田空港だった。今、プノンペンにいる。カンボジアに来て、ポルポトが教師だったことを思い出した。確か、毛沢東も教師だ。20世紀の代表的な大殺戮者が二人とも教師出身だというのは面白い。農業の重要性を主張したことも似ているのだが、彼らの政策の失敗を見ても、彼らの農業に対する無知は明瞭だ。というか、生産というものに対する合理的判断能力を決定的に欠いている。彼らは、観念的な農本主義者だが、それ以上に原始共産制に対する盲目的な憧れのようなものがある。どんな憧れを持とうが構わないが、それを現実にしようとすれば失敗するに決まっている。その農業はむしろ原始共産制の否定だ。観点的でアホな理想主義が大量殺りくに結びついた。それ以外にも自己保身や猜疑心というの働いているのだろう。何も教師を批判する気はない。教師の多くは一生懸命やっている。しかし、教師の職業はある意味で洗脳だ。教師が相手にするのは若者・子供だ。子供は一生懸命だ。どちらも子供を洗脳することによって大量殺戮を可能にした。面白いことに洗脳に優れた人間は何故か洗脳に弱い。本人が一生懸命信じるのが洗脳のコツなのだろう。

国際社会の無定見だって非難しようと思えばできる。米中が手を結びベトナムを支援するソ連と対抗しようとし、東南アジア諸国はベトナムの勢力拡大を恐れるという国際政治の対立の中で、ポルポト政権は国連代表権を保持した。国連なんていい加減ものだ。最後までポルポト政権を信じて、結果的に世界を欺くことに協力したスウェーデンの無定見だけをことさら非難しても仕方がない。日本政府だって、ポルポト政権をすぐさま承認した。別に誰とは言わないが、記者として事実を調べることもなくポルポト政権を絶賛して、後にテレビのコメンテーターになった人もいた(死者に鞭打つのは筆者の倫理に反するが、マスコミ・言論界に影響を持った人のようなので、事実だけは揚げておく)。当時は、ベトナム戦争でアメリカが敗北し、民族自立のような正義だけが語られていたように記憶している。

あの無定見かつ不道德な国連の場しか国際社会の合意の場がない。そういうバカげた機関である国連でもそれを壊してしまえば、それはそれで、新たな合意期間を機関を作らざるを得なくなる。新たに作れば、それもまた馬鹿野郎どもの塊になる。ああいうところに出てくる人はそういう人だから、その苦い現実を受け入れざるをえない。マスコミ人は最初から捏造が目的のだから全く信用ならないが、彼らがいないと情報が入らないという現

実もあるから、苦々しくても、彼らの存在を受け入れざるをえない（まあ、必ずどこかにウソが入っていると知って読んだり見たりすれば良いのですが。）。

エラソーなことを言っている、真面目そうで賢そうな人の意見は、時に全く信用できない。それが誰でもが持っているような感情や正義感に働きかけるときは特に危ない。だから、そういうものに振り回されないように気を付けて、多少軽蔑しながら距離を置いて見ようと言っているだけです。

全くの偶然だが、成田空港で書き始めた文章が、ブログの不具合で投稿できずに、しかたなく、あれこれ加えているうちに、キリングフィールドに結びついた。こんなことになるとは思わなかった。

(2015)